

観点別学習評価の共通理解に向けた 高等学校での教員間の交流

－ パフォーマンス課題の実践を通して －

学籍番号	239127
氏名	松田真由子
主指導教員	寺嶋浩介
副指導教員	佐々木靖

1. 背景と目的

実習校では「めざす生徒像」や生徒に身に付けさせたい力について、教員同士で話し合う機会がほとんどなく、その結果、教員が異なる方向を向いて学習指導に取り組んでいた。また、観点別学習評価についての校内研修も行われず、年次進行で行われていた観点別学習評価は、既に評価を実施している学年に所属する教員だけが個別に試行錯誤しているという状態であった。この課題に対し、2024年度から全面実施される観点別学習評価を共通テーマとし、校内研修を通じて、教員が同じ方向を向いて生徒の学習指導に取り組めるようにする必要性を感じた。そして、観点別学習評価やパフォーマンス課題についての共通理解を深めるための校内研修の計画を考えた。校内研修の文化が根付いていなかった高等学校で、「全教員を対象とした校内研修の実施」を最終目標とし、教員が一丸となって観点別学習評価やその趣旨に基づく指導を実践できる環境作りをめざそうと考えた。

本研究の最終目的は、観点別学習評価やパフォーマンス課題に関する校内研修の企画・運営を行うことである。そして校内研修を通じて、観点別学習評価に対する共通理解を全教員で深めることである。以下では、報告書の各章の内容について取り上げる。

2. 高等学校における観点別学習評価の状況

2024年度に、高等学校での新学習指導要領が全面実施を迎え、それに伴い、観点別学習評価を全教員が行うこととなった。この章では、新学習指導要領で必要とされる資質・能力、そして観点別学習評価について整理した。また大阪府教育委員会や教育センターが発行したリーフレット等を基に、新学習指導要領の全面実施を迎えるに当たっての、大阪府の取り組みについても言及した。

更に、高等学校での観点別学習評価の実施が、何故これほどまでにインパクトを与えるのかについて、実習校の様子から考察した。新学習指導要領の観点別学習評価では、従来の大学受験中心の授業からの転換が求められているが、多くの教員は評価基準の複雑化やパフォーマンス課題の導入に戸惑い、否定的な意見も多い状況であった。一方で、この評価方法は「社会に必要な資質・能力」を育成するために不可欠である。教員はこの趣旨を理解し、協働して授業や評価を考えていく必要があると感じた。

3. 実習校における観点別学習評価の状況

実習校の観点別学習評価やパフォーマンス課題の実態を把握し、校内研修に対する意識調査を行うため、アンケートを実施した。その結果から、実習校の多くの教員が特に「思考力・判断力・表現力」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価に難しさを感じていることが明らかになった。パフォーマンス課題については、多くの教科で設定されていた。さらに、約7割の教員が校内研修の回数が十分でないと感じており、観点別学習評価に関する研修実施に対して、肯定的な意見が多いことも判明した。これらの結果から、筆者の計画する実習は、実習校にとって必要で適切な取り組みであることが確認された。

実習校の現状やアンケート結果から、本研究のテーマを冒頭のように決定した。また、校内研修のテーマとして観点別評価やパフォーマンス課題を取り上げ、筆者もパフォーマンス課題を扱う授業開発を通じて、知識や経験を深めることとした。観点別学習評価の実践を通じて、教員全体での理解促進を図ることをめざし、校内研修の企画・運営と自身の授業開発を学校実習の2つの主要テーマとして位置付け、この取り組みを進めていくこととした。

4. 英語科の授業におけるパフォーマンス課題の実践

筆者が授業を考える際に参考にした、「逆向き設計」「GRASPS」(Wiggins & Mctighe 2014)「単元を貫く問い」(石井 2023)について簡単に説明し、筆者がこれらを用いてどのように4回の授業を設計したかについて述べた。授業実践では、1つの観点の評価する授業から、複数の観点を網羅する授業へと発展させた。また、課題点を次回の授業実践に活かすことを心掛け、「単元を貫く問い」を設定し、様々なパフォーマンス課題を実施した様子をまとめた。

また、観点別学習評価を初めて行う0教諭の授業や評価の支援を行い、筆者の大学院での学びや授業実践を共有した。約3か月に渡る伴走を行い、インタビューを行った。実際にどのような準備をし、どのような展開で授業を行うのか、などの実用的な部分と、観点別評価に対する漠然とした不安の払拭、などの精神的な部分での支援があったことが分かった。

5. 校内研修の企画・運営

2年間の計画として、1年めは筆者の所属学年の教員を対象、2年めは学校全体の教員を対象とした校内研修を実施した。1年めは筆者が企画・運営を行い、2年めは、チームを組織し、共同で研修の企画・運営を進め、主に筆者とM首席が共同で担当した。研修後のアンケートでは、「テーマへの理解の深まり」「テーマへの共通理解」「授業や評価の工夫の必要性」「授業や評価の改善の必要性」について尋ね、98%の肯定的な回答があり、研修の効果が確認できた。

特に、2年めのアンケート結果では、「共通理解」や「改善の必要性」に対する最も肯定的な回答が1年めに比べて増加した。これは、教科を超えた教員同士の協力が重要な要素となり、チームで研修を主催し、教科を超えての意見交換や、他教科の実践を知る機会を設けたことで、教員の認識に共通点が生まれたことが大きく影響していると考えられる。「チームで校内研修を実施したことが、今後の教員間の相互授業見学の活性化にもつながって欲しい」というM首席や学校長の意向を受け、次年度以降も相互授業見学の日常化をめざすこと、そして教員間の相互理解を深めるために、今後も校内研修を通じて教員間の連携強化をめざす。